

集団の印象に及ぼす集団サイズの処理様式の効果¹⁾

中 村 真

An Effects of Information-Processing Style on Group Impression

Shin NAKAMURA

キーワード：集団の印象，集団サイズ，相対化処理，非相対化処理

問題と目的

特定の集団に対する個人の否定的感情や拒否的な態度は，集団間葛藤をはじめとする事態において古くから問題とされてきた。それらは，「ステレオタイプ」や「偏見」に焦点を当てた様々な研究において解明が試みられてきている。近年では，これらに加えて認知社会心理学的な知見による差別や偏見へのアプローチが脚光を浴びている。つまり，個人がその認知過程において実際はそうでないにも関わらず特定の集団を否定的に認知するという傾向であり，従来と異なって，その形成過程が学習経験や動機的側面，パーソナリティとは独立したものであるという立場をとっている。すなわち，特定の個人や集団に対する「偏見」が，人間の認知機能そのものによって引き起こされるとする立場である。

中村・佐藤（1994 a）では，集団を認知する際に生じるこのようなバイアスの原因として，集団サイズに注目した。そこでは，メンバー数が異なる4つの仮想集団を刺激に用いて，「集団サイズ」と「被験者の集団への態度」のあいだに何らかの関連性があるか否かを検討した。その結果，予め，集団サイズと集団の望ましさととのあいだには関連がないように条件を統制したにも関わらず，集団に対する印象は集団サイズが大きいほどポジティブになった。このような傾向は，杉森（1993）などで繰り返し確認されており，我々が集団の印象を形成する際には，そのサイズがバイアスとなって判断を偏らせていることがうかがえる。

その原因として，集団サイズが大きいほど，集団メンバーに関する情報を処理する頻度が増

えるので当該集団に対する親和性が高まるという、いわゆる単純接触効果 (Zajonc, 1968) が考えられる。しかし、他の条件を変えずに、刺激集団のサイズのみを2倍にして行った実験 (中村・佐藤, 1994 b) も中村・佐藤 (1994 a) とほぼ同様の結果を示した。仮に、刺激を処理する頻度とその刺激に対する親和性とのあいだに単純な正の相関関係が成立するならば、後者の実験における刺激集団の評価は、前者のそれよりも全体的に肯定的な評価の度合いが増したはずである。

これらの結果は、規模の異なる複数の集団に対する印象が、集団成員の絶対数のみによって規定されるわけではなく、当面する集団の相対的な人数関係 (規模の違い) に影響される可能性があることを示唆している。そこで、本研究では、規模が異なる複数の集団に対して印象を形成する際の情報処理様式に注目し、集団メンバーの情報を相対的に処理しなかった場合 (以後、「非相対化処理」と呼ぶ) と、集団サイズの相対的な関係を認識しながらメンバーの情報を処理した場合 (以後、「相対化処理」と呼ぶ) の印象を比較検討した。一連の研究 (中村・佐藤, 1994 a ; 中村・佐藤, 1994 b) により導かれた仮説が正しければ、ポジティブ・バイアス効果 (杉森, 1990 : 集団サイズが大きいほどその印象がポジティブになる) が、非相対化処理群よりも相対化処理群で顕著となるだろう。

方 法

1) 被験者

東京都内の看護学校学生 (40 人)

2) 刺激

①ターゲット集団

ターゲット集団として、成員数の異なる4集団を設定した (LL 集団(16 人), L 集団(12 人), M 集団(8 人), S 集団(4 人))。被験者には, LL, L, M, S の各集団をそれぞれ W 校, X 校, Y 校, Z 校に所属する学生の情報として提示した。

②集団成員の行動記述

「☆校の□さんが～した」という形式の刺激文を構成するための行動記述40個を中村・佐藤 (1994 b) で用いたものの中から選択し, 1個ずつ各刺激集団の各成員に割り付けた。行動の望ましさは, 4つの刺激集団で等しくなるようにした。

3) 手続き

①まず, 40の刺激文から成る冊子 (刺激文の順序はランダム) を被験者に配布し, 実験者

の指示に従いページをめくって刺激文を読むよう求めた（1文あたり10秒間提示）。

②従属変数の測定。

4) 従属測定

①割合推定

4つの刺激集団ごとに「望ましい行動をした者」と「望ましくない行動をした者」の割合を合計100%となるように推定させた。

②印象評定

白井（1979）が用いた「社会性次元4項目」と林（1978）の「社会的望ましさ3項目、および「個人的親しみやすさ3項目」の計10項目について4つの集団の印象を7段階で評定してもらった。表1は、印象評定項目一覧を示したものである。

表1 印象評定項目

1) 人気がある
2) 人なつこい
3) 親しみやすい
4) 社交的
5) 素直な
6) 陰鬱
7) 短気
8) 不幸せ
9) 暗い
10) ユーモアのない

③人数推定

4つの刺激集団のメンバーの合計が40人であったことを被験者に教えた後で、それぞれの集団のメンバー数が何人ずつであったと思うかを4つの集団メンバー数の合計が40人となるように推定させた。

結果と考察

(1) 集団情報の処理様式の選定

4つの刺激集団ごとに推定した人数が、 $LL > L \geq M > S$ 、または、 $(LL \geq L) > (M \geq S)$ である被験者を「相対化処理群」とし、この条件に当てはまらない者を「非相対化処理群」とした。つまり、相対化処理群は、4つの刺激集団の人数比をある程度正確に相対化して認知し

ていると見なす。一方、非相対化処理群の被験者は、刺激集団の規模を正確にとらえていないと判断した。その結果、相対化処理群は10人、非相対化処理群は30人であった。これらは、後の分析において、集団サイズ情報の処理様式が、集団の印象に及ぼす影響を検討する際に用いる。

(2) 割合推定

集団別に推定された行動カテゴリーの割合は、表2、表3に示した通りである。非相対化処理群では、M集団を除く3つの集団で「望ましいメンバー」と「望ましくないメンバー」の人数比に有意な差がなかった。これに対して、相対化処理群では、LL集団およびL集団で「望ましいメンバー」を「望ましくないメンバー」よりも多く推定している。つまり、各集団のサイズを相対的に処理している者は、多数派集団(LL, L)のメンバーを少数派集団(M, S)よりもポジティブに捉えている。しかし、非相対化処理群では、集団サイズとメンバーの望ましさの間に明確な関連性が見られない。したがって、予測した通り、相対化処理群において顕著なポジティブ・バイアス効果が確認されたと言える。すなわち、予め4つの刺激集団間でメンバーの行動の望ましさを等しく設定したにも関わらず、規模の大きな集団を肯定的に、また、規模の小さな集団を否定的に認知していることが示された。

表2 「非相対化処理群」における推定された行動カテゴリーの割合 (%)

	LL 集団	L 集団	M 集団	S 集団
望ましい行動 (%)	56.41	54.00	61.85	49.93
望ましくない行動 (%)	43.59	46.00	38.15	50.07
差	12.82	8.00	23.05*	-0.14

*は、 $p < .05$ を示す。

表3 「相対化処理群」における推定された行動カテゴリーの割合 (%)

	LL 集団	L 集団	M 集団	S 集団
望ましい行動 (%)	64.54	66.36	56.82	55.46
望ましくない行動 (%)	35.46	33.64	43.18	44.54
差	29.08*	32.72*	13.64	10.92

*は、 $p < .05$ を示す。

(3) 印象評定

まず、4つの刺激集団についての印象評定データをもとに、160 (4刺激集団×40人) ×

集団の印象に及ぼす集団サイズの処理様式の効果

10項目のデータ・マトリックスを作成した。次に、このデータ・マトリックスにおける項目間相関係数行列を算出し、因子分析を行った。

その結果、固有値や因子の解釈のしやすさ等を考慮した上で、2因子を抽出した。表4は、バリマックス回転後の因子負荷量を示したものである。第一因子は、「人気がある」、「人なつこい」、「親しみやすい」、「社交的」、「素直な」で構成されており、これを「肯定因子」とした。また、第二因子は、「陰鬱」、「短気」、「不幸せ」、「暗い」、「ユーモアのない」で構成されている。したがって、これを「否定因子」とした。

次に、被験者ごとにそれぞれの因子を構成する項目の合成得点を算出し、それらをZ得点に変換した。さらに、因子ごとに2（集団情報の処理様式：相対化処理群、非相対化処理群）×4（集団の規模）の2要因分散分析を行った。この場合、「集団の処理様式」の要因は、被験者間要因であり、「集団の規模」の要因は被験者内要因である。

表4 因子負荷量行列（主因子法、バリマックス回転）

評定項目	「肯定」因子	「否定」因子	共通性
人気がある	.847	.026	.718
人なつこい	.818	-.030	.670
親しみやすい	.770	.000	.593
社交的	.714	.057	.513
素直な	.534	-.002	.285
陰鬱	.009	.869	.755
短気	.209	.845	.758
不幸せ	-.011	.786	.618
暗い	-.157	.772	.621
ユーモアのない	-.221	.419	.224
寄与	2.892	2.863	

その結果、肯定因子、否定因子ともに、「集団情報の処理様式」（肯定因子：df = 1, F = .08, 否定因子：df = 1, F = 1.16）と「集団の規模」（肯定因子：df = 3, F = 1.16, 否定因子：df = 3, F = 1.47）に主効果はなかった。しかし、「集団情報の処理様式」×「集団の規模」の交互作用が、2つの因子で有意であった（肯定因子：df = 3, F = 3.70, p < .05, 否定因子：df = 3, F = 2.85, p < .05）。これを示したのが、図1と図2である。これを見ると、概して、相対化処理群では、集団の規模が大きくなるに従って、肯定因子の得点が高くなっており、逆に、否定因子の得点は、集団の規模が小さいほど高くなっている。しかしながら、非相対化処理群では、処理様式と集団規模のあいだに、このような関連性が見られなかった。したがって、

集団の規模を相対的に処理している者は多数派集団に対して肯定的に、また、少数派集団に対して否定的に評価する傾向があることが示された。また、ここでは、ポジティブ・バイアス効果のみならず、ネガティブ・バイアス効果も確認された。

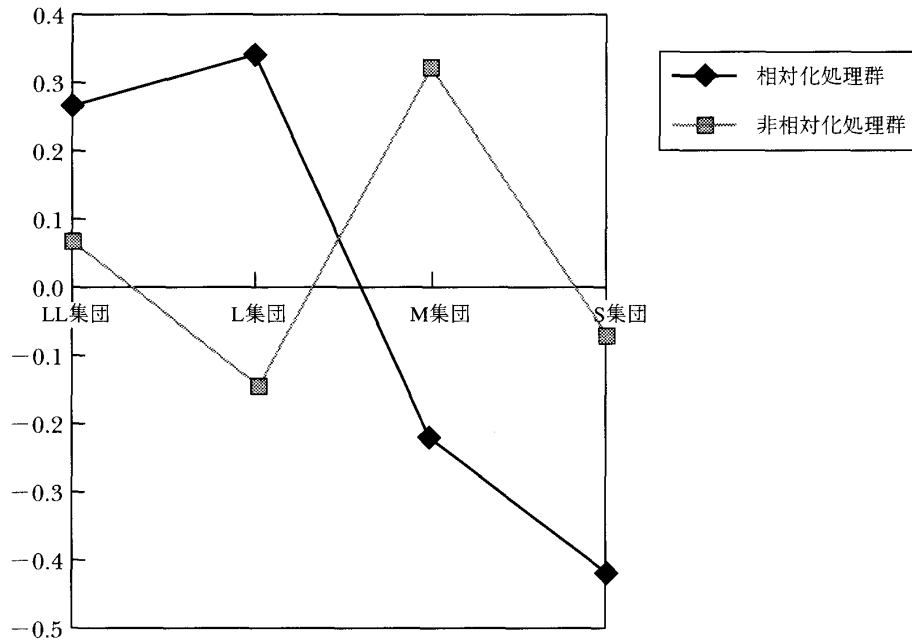


図 1. 各集団に対する印象評定値（肯定因子）

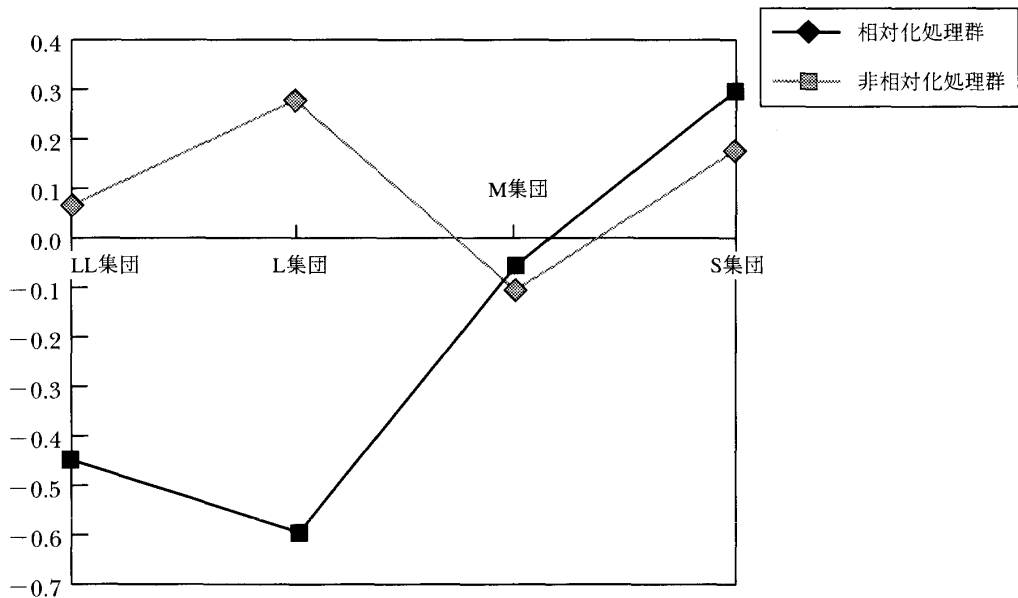


図 2. 各集団に対する印象評定値（否定因子）

集団の印象に及ぼす集団サイズの処理様式の効果

これらの結果を総合的に判断すると、本研究における仮説、すなわち、“個人が規模の異なる集団を認知する際には、集団サイズが大きいほどその印象がポジティブになるという、いわゆるポジティブ・バイアス効果が相対化処理群で顕著である”ということがほぼ支持されたと言えよう。

予め、刺激集団のサイズを教示した場合に、規模の小さな集団に対する印象が悪くなるという報告（杉森，1995）がある。確かに、事前の情報がトップダウン的な処理を促進し、バイアスが生じやすくなるという点は無視できない。しかし、本研究のように、集団サイズに関する事前情報を与えなくても、情報を処理していく過程において集団サイズが相対化して捉えられた場合、その印象にバイアスがかかることが示された。ここで言う「相対処理」がどのように生じるのかについて、さらに詳細に検討していく必要があるだろう。

注

- 1) 本論文は、日本グループ、ダイナミクス学会第44回大会（1996）において発表したものに加筆・修正したものである。

文 献

- 林 文俊 1978 対人認知の基本的次元についての一考察. 名古屋大学教育学部紀要, **25**, 233-247.
- 中村 真・佐藤達哉 1994 a 集団サイズがもたらす認知的バイアスに関する研究Ⅰ：大集団に対する肯定的評価と小集団に対する否定的評価について. 日本心理学会第58回大会発表論文集, 159.
- 中村 真・佐藤達哉 1994 b 集団サイズがもたらす認知的バイアスに関する研究Ⅱ：相対的な集団サイズの効果について. 日本社会心理学会第35回大会発表論文集.
- 白井泰子 1979 ステレオタイプの判断の認知的基礎—誤った関連づけの認知—実験社会心理学研究, **19**, 61-69.
- 杉森伸吉 1990 Illusory correlation の認知的基礎：成員の好ましさは集団サイズと交互作用している日本グループ・ダイナミクス学会第38回大会発表論文集, 33-34.
- 杉森伸吉 1993 集団サイズと成員誘意性の顕著性の交互作用—集団サイズ自体の効果— 心理学研究, **64**, 16-24.
- 杉森伸吉 1995 母集団サイズと集団誘意性間の幻相関認知に関する実験的研究 社会心理学研究, **11**, 39-50.
- Zajonc, R. B. 1968 Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology, Monograph supplement*, **9**, 1-29.